



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

## 発達障害児の示す自傷行動と活動レポーターとの 関係性について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朝倉, 知香, 小笠原, 恵 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/2091">http://hdl.handle.net/2309/2091</a>

## 発達障害児の示す自傷行動と活動レパートリーとの関係性について\*

朝倉 知香\*\*・小笠原 恵\*\*\*

支援方法学

(2004年10月29日受理)

### 1 はじめに

発達障害児に見られるいわゆる「行動問題」は、今日でも教育機会や地域社会への参加を阻害し、彼らの豊かな生活の質（Quality of Life；以下QOLとする）の実現を脅かす主要な原因として、教育や福祉現場および関連する療育機関において克服すべき危急な課題（藤原，1999<sup>9)</sup>）とされている。

今日までの研究において、行動問題は何らかの強化を要求するコミュニケーション手段のひとつであることが明らかになってきた（Durand & Crimmins, 1988<sup>6)</sup>；平澤・藤原，1995<sup>13)</sup>）。行動問題の出現には、他者に対する自分の意思を伝えることの出来る適切なコミュニケーションスキルを持っていなかったり、また適切なコミュニケーション手段より行動問題のほうが労力が少なく、他者に対して確実に意志を伝達できる場合があるといった要因がある。一方、ことばを持たず、簡単な指示理解も充分でないうえに、激しい行動問題を示す重度の知的障害児の場合には、極端に活動レパートリーが乏しいことが指摘されている（平澤・藤原，2002<sup>14)</sup>）。また活動レパートリーの少ない重度知的障害児は、レパートリーが少ないゆえにその感覚自体を求めて行う感覚性の行動問題を行なっていることが多く、それらの行動問題のために彼らの活動レパートリーを狭めているとも言える（平澤・藤原，2002<sup>14)</sup>）。

様々な表出形態を示す行動問題のなかでも自傷行動はとりわけ問題性の高い行動のひとつであり（肥後・小林，2000<sup>11)</sup>）、人間の健康やQOLに密接に関わるため（Symons, Koppekin, & Wehby, 1999<sup>31)</sup>）、介入の必要性が高いものであると考えられる。自傷行動の中でも感覚性のものは、暇なときにその行動自体が生み出

す感覚を求めて、あるいは嫌な刺激から逃れるために、自分で刺激を出して（井上，1998<sup>17)</sup>）刺激を享受するという、自動強化（Iwata, Dorsey, Slifer, Bauman, & Richman, 1982<sup>19)</sup>）によって維持されている。また、行動問題の形態と機能についての調査を行った研究（小笠原・守屋，2003<sup>22)</sup>）では、自傷行動は感覚性のものが多いことを指摘している。

感覚性の自傷行動を示す子どもが、興味を持つ活動に従事できる時間を増やしていくことによって対象児の生活から自傷行動を“締め出す”（Risley, 1996<sup>24)</sup>）ことができれば、自傷行動を減少させることができるのではないだろうか。

今日までの研究において、自傷行動の表出形態（Emerson, Kiernan, & Alborz, 2001<sup>8)</sup>；肥後・小林，1990<sup>11)</sup>；飯田・岩坂・平尾・田原・橋野・松村・木寺・井川，1993<sup>16)</sup>；篠崎・古川，1993<sup>29)</sup>）、自傷行動と知的障害の有無との関係性（Einfeld, 1992<sup>7)</sup>；Schroeder, Tessel, Loupe, & Stodgell, 1997<sup>26)</sup>）、自傷行動と自閉症の有無（Sturme & Vernon, 2001<sup>30)</sup>；Wing & Attwood, 1987<sup>32)</sup>）、自傷行動と身辺処理・粗大運動・コミュニケーションなどの適応スキル（Borthwick-Duffy, 1994<sup>3)</sup>；Emerson et al., 2001<sup>8)</sup>；Kiernan & Qureshi, 1993<sup>21)</sup>；Schroeder et al., 1997<sup>26)</sup>）、自傷行動を示す人の理解レベル（Chamberlain, 1993<sup>4)</sup>；Schroeder, Schroeder, Smith, & Dalldorf, 1978<sup>25)</sup>）などが明らかにされてきている。しかし発達障害児の示す自傷行動と活動レパートリーとの関係性については明らかにされたものはない。

本研究では、自傷行動の出現傾向について、①自閉症の有無、②コミュニケーション手段、③自発的な活動レパートリーとの3つの関係性から明らかにするこ

\* Self-injurious behaviors and activity repertoires in developmental disabilities / Tomoka ASAKURA, Kei OGASAHARA

\*\* 東京学芸大学大学院 教育学研究科 障害児教育専攻

\*\*\* 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

とを目的とする。

## 2. 方法

### 2.1 対象

東京都立知的障害養護学校小学部から高等部に通う発達障害児を対象とし、各児童・生徒の担任教師に回答を求めた。

### 2.2 調査方法

東京都立知的障害養護学校31校に対し、事前にアンケートに協力をいただけるかどうか調査を行った。協力をいただけるという返信があった14校に対し、アンケート用紙を663枚送付した。回収枚数は501枚であり、回収率は75.6%であった。

### 2.3 調査時期

2004年5月初旬アンケート協力依頼の葉書を送付し、協力いただける旨の返信があった学校へ5月下旬から6月下旬にアンケート用紙を送付した。回収は6月下旬から7月下旬までとした。

### 2.4 調査項目

アンケートの調査項目および回答方法は、以下に示した表1の通りである。

表1 アンケート 調査項目および回答方法

	調査項目	回答方法
質問1	対象となる児童生徒の所属学部・学年	択一式・記述式
	自閉症または自閉的傾向の有無	択一式
	音声言語の有無	択一式
	コミュニケーションの表出手段	択一式
	指示理解(受容言語)	択一式
質問2	自傷行動の形態	行動形態:記述式 強度・頻度:択一式
質問3	活動レポートについて	具体的活動:記述式 頻度・積極性:択一式

### 2.5 調査の対象となった児童・生徒

前述した方法に基づき、調査を依頼・実施したところ、14校から協力が得られた。その結果、小学部194名、中学部148名、高等部159名、合計501名分の回答を得ることができた。

## 2.6 分析項目と分析方法

### 2.6.1 自閉症群と非自閉症群における生活年齢群別の自傷行動の出現率

自閉症または自閉傾向の有と回答された児童・生徒

を自閉症群、無と回答された児童・生徒を非自閉症群の2群に分類した。さらに学齢期を小学部低学年(1～3年)、小学部高学年(4～6年)、中学部、高等部の4つの生活年齢群に分類した。「自閉症群と非自閉症群の生活年齢群別の自傷行動の出現率」は、以下の式を用いて算出した。

「自閉症群における生活年齢群別の自傷行動の出現率」(%)

=各生活年齢群における自閉症群で「自傷行動の出現がある」の回答数÷各生活年齢群の自閉症群の人数×100

「非自閉症群における生活年齢群別の自傷行動の出現率」(%)

=各生活年齢群における非自閉症群で「自傷行動の出現がある」の回答数÷各生活年齢群の非自閉症群の人数×100

また、上記の式から算出した結果について、自閉症群と非自閉症群においては自傷行動の出現率に有意差があるのかどうか、カイ二乗検定により検討を行った。

### 2.6.2 自傷行動とコミュニケーション手段との関係性について

自傷行動が「ほぼ毎日」「時々」と選択されたものを高頻度群、「ほとんどない」と選択されたものを低頻度群、「自傷行動がない」と選択されたものをなし群とし、3つの群に分類した。自傷行動の出現頻度の違いによりコミュニケーション手段には何らかの傾向があるのかどうかについて、カイ二乗検定により検討を行った。コミュニケーション手段は「明確な表出手段がない」、「クレーン・手さし・指さし・ジェスチャー・サイン」、「AAC」、「一語文」、「二語文」、「多語文」の6段階に分類した。さらに調整化残差を算出し、自傷行動の出現頻度の違いとコミュニケーション手段との関係性を検討した。

### 2.6.3 自閉症群と非自閉症群における自傷行動の形態別出現率について

自傷行動の形態は、Emerson et al. (2001<sup>8)</sup>)を参考に、「頭叩き」「頭打ち」「かむ」「つねる・ひっぱる」「抜毛」「その他」の6つの出現形態に分類した(表2)。

各生活年齢群ごとに「自閉症群と非自閉症群における自傷行動の形態別出現率」を以下の式を用いて算出した。

「自閉症群における自傷行動の形態別出現率」(%)  
 =各生活年齢群における自閉症群の自傷行動の各形態の回答数÷各生活年齢群における自閉症群の自傷行動を示す人数×100

「非自閉症群における自傷行動の形態別出現率」(%)  
 =各生活年齢群における非自閉症群の自傷行動の各形態の回答数÷各生活年齢群における非自閉症群の自傷行動を示す人数×100

「自傷行動の出現頻度群別常同行動の出現率」(%)  
 =常同行動の各出現頻度群における人数÷自傷行動の各出現頻度群の総人数×100

表2 自傷行動の出現形態

行動形態	定義	例
頭叩き	頭や顔等、頭部を自分の手で叩く	頭叩き、耳を叩く、など
頭打ち	頭部をものや人に打ち付ける	頭を壁に打ち付ける、頭を机に打ち付ける、など
かむ	自分の身体の一部を自分の口でかむ	腕をかむ、指をかむ、手をかむ、など
引っかく・つねる	自分の身体の一部を自分の爪で引っかく、あるいは自分の指でつねる	顔を引っかく、腕をかきむしる、かさぶたをはがす、足をつねる、など
抜毛	自分の髪の毛を抜くあるいは引っ張る	髪の毛を抜く、髪を引っ張る
その他	上記に該当しないが、自分の身体の一部を自分で傷つけるもの	腕を硬いものにこすりつける、目おし、など

2.6.4 自傷行動の出現頻度群別常同行動の出現率について

常同行動が「ほぼ毎日」「時々」と選択されたものを高頻度群、「ほとんどない」と選択されたものを低頻度群、「常同行動がない」と選択されたものをなし群とし、3つの群に分類した。常同行動の3群の出現率を自傷行動の3群の出現頻度ごとに算出した。

2.6.5 自傷行動の出現頻度群別自発的な活動数の平均値について

3群に分類した自傷行動の出現頻度群ごとに、自発的な活動数の平均値を算出した。

「自傷行動の出現頻度群別の自発的な活動数の平均値」

=自傷行動の各出現頻度群の各生活年齢群における自発的な活動の総数÷各生活年齢群の自傷行動の出現頻度群別の人数

2.6.6 自傷行動と自発的な活動数の関係性について

自傷行動の出現頻度の高頻度群となし群とでは、自発的な活動数に差があるかどうか、Wilcoxonの順位相関検定を用いて、自傷行動と活動レパートリー数の関係性について検討を行った。

2.6.7 生活年齢群別の自発的な活動レパートリーの出現率

活動レパートリーは、Piaget (1945<sup>23)</sup>) および伊藤 (2001<sup>15)</sup>) を参考にして、15項目に分類した(表3)。

各生活年齢群における自発的な各活動レパートリーの出現率は以下のように算出した。なお、1種類の活動レパートリーに複数の活動が含まれていてもダブルカウントはせず、1つの活動レパートリーとしてカウ

表3 各活動レパートリーの定義

活動レパートリー	定義	例
感覚遊び	そのもの本来の使い方ではなく、そのものが産出する感覚を楽しんでいる	水遊び、ひも回し、など
並べる、集める	そのもの本来の使い方ではなく、一定の種類のを並べたり集めたりする	ミニカーを並べる、色ペンを並べる、木の枝を集める、など
人や動物の観察	他の人の動きや虫や魚などの動物を眺める	友達の動きを観察する、虫を観察する、など
探索	何らかの目的があって、ものや人を探す	友達を探しに行く、自分の好きなものを探す、など
絵本などを見る	絵本やビデオ、写真などを見る。絵本や本を読む場合は除外	絵本、絵本を見る、ビデオを見る、アルバムを眺める、など
音楽を聴く	音楽を聴く	CDをかけて聴く、など
おもちゃの操作	おもちゃを本来、もしくは本来に近い使い方操作する	おもちゃで遊ぶ、パズルをする、など
音楽活動	音楽にあわせて、身体を動かしたり歌を歌う、あるいは楽器を演奏する	ダンス、歌を歌う、ギターを弾く、オルガンを弾く、など
身体活動	一人で何らかの遊具を使って身体を動かす	固定遊具で遊ぶ、ボールを転がす、ブランコ、など
物を作る	一人で道具を用いて製作をする	工作、手芸、絵を描く、など
課題	一人で行うことができるペーパーワークや先生から課題として挙げられたもの	漢字の練習、日記を書く、など
パソコン	パソコンを使うもの	パソコン、インターネット、など
対人遊び	複雑なルールのない他の人との遊び	追いかけっこ、ごっこ遊び、おままごと、など
他の人とのおしゃべり	他の人と話す	友達とのおしゃべり、先生とのおしゃべり、など
ルールのある遊び	ルールのある遊びで対人遊びに含まれないもの	サッカー、ゲーム、など

ントした。

「各生活年齢群別の自発的な各活動レパートリーの出現率」(%)

=各生活年齢群における各活動レパートリーを有している人数÷各生活年齢群の人数×100

2.6.8 自傷行動の出現頻度群別の各活動レパートリーの出現率について

3群に分類した自傷行動の出現頻度群ごとに各活動レパートリーの出現率を以下のように算出した。なお、1種類の活動レパートリーに複数の活動が含まれていてもダブルカウントはせず、1つの活動レパートリーとしてカウントした。

「自傷行動の出現頻度群別の各活動レパートリーの出現率」(%)

=自傷行動の各出現頻度群における各活動レパートリーを有している人数÷自傷行動の各出現頻度群の総人数×100

2.6.9 自傷行動と活動レパートリーの種類と関係性について

自傷行動の高頻度群となし群では、自発的な活動レパートリーの種類に何らかの傾向があるかどうかについてカイ二乗検定により検討を行った。さらに調整化残差を算出し、自傷行動の出現頻度群別に示される自発的な活動レパートリーの種類や特徴について検討した。

3. 結果

3.1 自閉症群と非自閉症群における生活年齢群別の自傷行動の出現率 (図1)

有効回答数は494人、有効回答率は98.6%であった。

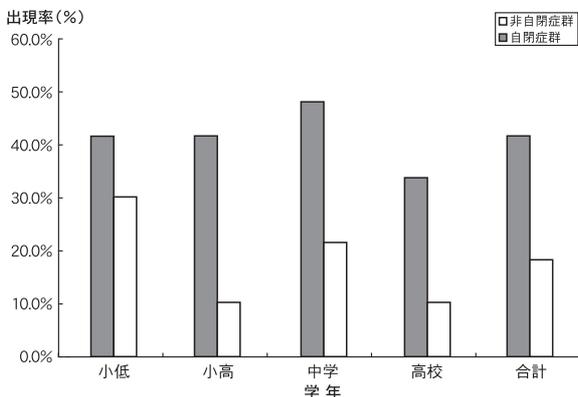


図1 自閉症群と非自閉症群における生活年齢群別の自傷行動の出現率

各生活年齢群ともに、自閉症群の自傷行動の出現率が高い結果となった。全体で見ると、自閉症群の自傷行動の出現率は41.4%、非自閉症群の自傷行動の出現率は18.0%であった。

また、全生活年齢による自閉症群と非自閉症群の自傷行動の出現率について、カイ二乗検定を行った結果、有意確率P=0.0000 ( $\chi^2 = 31.5954$ ,  $df=1$ ) で自閉症の有無によって自傷行動の出現率に違いがあることが明らかとなり、自傷行動の出現率は自閉症群において期待値より有意に高い結果となった。

3.2 自傷行動とコミュニケーション手段との関係性について

カイ二乗検定により検討を行った結果、有意確率P=0.0 ( $\chi^2 = 43.6274$ ,  $df=10$ ) で、自傷行動の出現頻度によって、主となるコミュニケーション手段の傾向には違いがあった。また、調整化残差を算出した結果、自傷行動を高頻度に示す子どもは「クレーン・手さし・指さし・ジェスチャー・サイン」が主となるコミュニケーション手段であることが多く、「多語文」を主となるコミュニケーション手段としていることは少ない傾向にあることが明らかになった。また自傷行動の低頻度群では「AAC」が主となるコミュニケーション手段であることが多く、「明確な表出手段がない」子どもが少ないことが明らかになった。自傷行動なし群では、「多語文」が主となるコミュニケーション手段であることが多く、「クレーン・手さし・指さし・ジェスチャー・サイン」を主となるコミュニケーション手段としている子どもが少ないことが明らかになった。

3.3 自閉症群と非自閉症群における自傷行動の形態別出現率について (図2, 3)

有効回答数は494人、有効回答率は98.6%であった。自閉症群の自傷行動の行動形態は、各生活年齢群ともに「頭叩き」の出現率が高く、次いで「かむ」が高い結果となった。非自閉症群の自傷行動の行動形態は「頭叩き」の出現率が高いという自閉症群と同様の結果が得られたが、「頭叩き」以外の出現形態の出現率に一定した傾向はなかった。

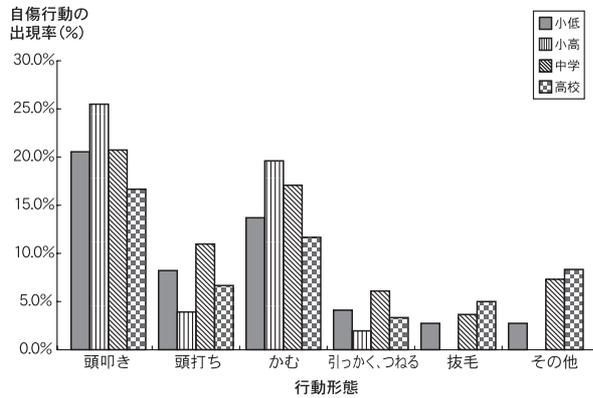


図2 自閉症群における自傷行動の形態別出現率

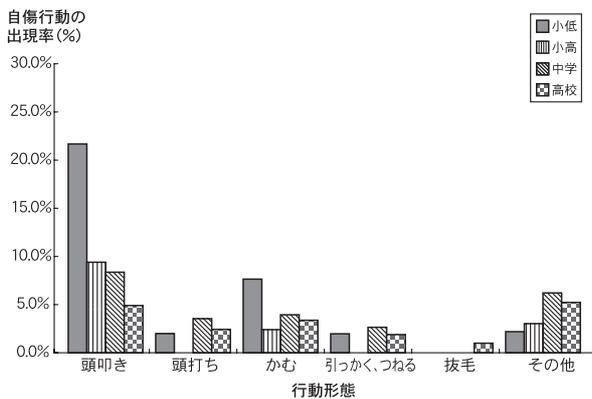


図3 非自閉症群における自傷行動の形態別出現率

### 3.4 自傷行動の出現頻度群別常同行動の出現率について (図4)

有効回答数は493人、有効回答率は98.4%であった。自傷行動の出現頻度群別に常同行動の出現頻度について検討した。常同行動が高頻度で示されたのは、自傷行動の高頻度群であり、50%近くの出現率であった。自傷行動の低頻度群では常同行動高頻度群の出現率は約37%、なし群では約22%であった。

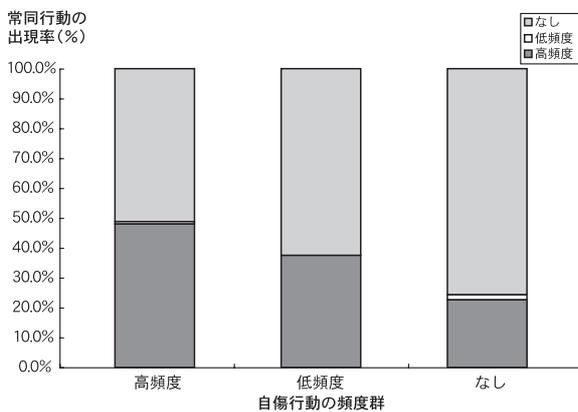


図4 自傷行動の出現頻度群別常同行動の出現率

### 3.5 自傷行動の出現頻度群別自発的な活動数の平均について

有効回答数は442人、有効回答率は88.2%であった。

自発的な活動数の平均は自傷行動の高頻度群2.12 (0~8の範囲)、低頻度群は2.33 (0~7の範囲)、なし群は2.32 (0~10の範囲) であり、それぞれの群の平均値に顕著な差はなかった。

### 3.6 自傷行動と自発的な活動レポーター数の関係性について

Wilcoxonの順位検定を用いて自傷行動と自発的な活動レポーター数の関係性について分析を行った結果、有意な差は見られなかった(順位和22468.5、両側検定23.34%、片側検定11.67%)。

### 3.7 生活年齢群別の活動レポーターの出現率について (図5)

有効回答数は443人、有効回答率は88.4%であった。小学部低学年は絵本をみることや身体活動、おもちゃの操作、感覚遊びをしている児童が多い結果となった。小学部高学年においても身体活動、絵本を見ることや感覚遊びが多い結果となった。中学部では絵本を見ることや身体活動、対人遊びが多い結果となった。高等部では絵本を見る活動や課題のほか、対人遊びやほかの人のおしゃべりなどが多かった。

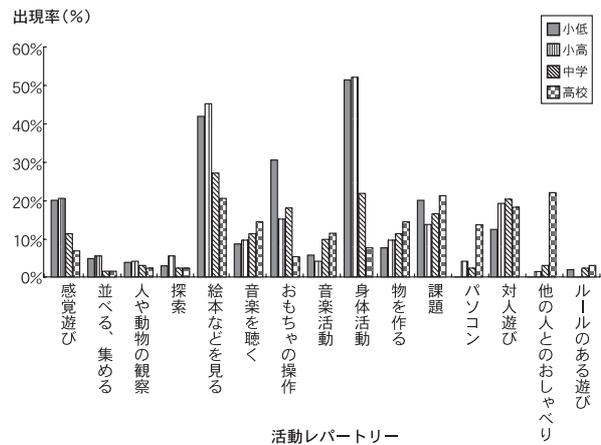


図5 生活年齢群別の活動レポーターの出現率

### 3.8 自傷行動の出現頻度群別活動レポーターの出現率について (図6)

有効回答数は443人、有効回答率は88.4%であった。自傷行動高頻度群の30%以上が示した活動レポーターは身体活動であり、次いで感覚遊びが24%程度となった。反対に、ルールのある遊びは1%以下でしか示されなかった。自傷行動低頻度群の40%以上が絵本などを見る、約30%が課題やルールのある遊びを主な活動レポーターとしていた。なし群では3群の中で対人遊びが20.7%と最も高い結果となり、反対に感覚遊びや物を並べるなどの活動が10%以下という低い結果

となった。

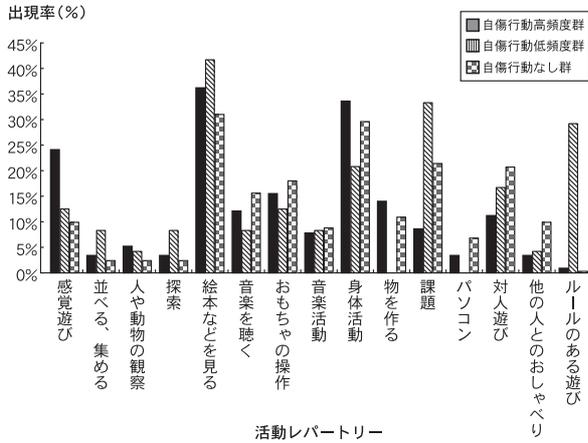


図6 自傷行動の出現頻度群別の各活動レパトリーの出現率

### 3.9 自傷行動と活動レパトリーの種類と関係性について

カイ二乗検定を用いて自傷行動と活動レパトリー数の関係性について検討した結果、有意確率 $P=0.0008$  ( $\chi^2=36.7731$ ,  $df=14$ )となり、自傷行動の出現頻度によって活動レパトリーの種類には違いがあることが明らかになった。さらに調整化残差を吟味したところ、自傷行動の高頻度群は感覚遊びが多く、課題を行っている子どもが少ないことがわかった。また自傷なし群では課題を行っている子どもが多く、感覚遊びが少ないことが明らかになった。

## 4. 考察

### 4.1 自傷行動と自閉症の関係性について

本研究の調査より、自閉症と自閉症でない子どもの自傷行動の出現率を比較した結果、自閉症の子どもの方が2倍以上高い出現率を示した。従来の研究においても (Sturme et al., 2001<sup>30</sup>) ; Wing et al., 1987<sup>32</sup>) 自閉症における自傷行動の出現率の高さが指摘されており、本研究においても同様の結果が得られた。

### 4.2 自傷行動とコミュニケーション手段との関係性について

コミュニケーション機能に障害があると行動問題が重度化したり、行動問題の出現率が高くなることは先行研究でも明らかにされており (Borth-wick, 1994<sup>3</sup>) ; Chamberlain et al., 1993<sup>4</sup>) ; Emerson et al., 2001<sup>8</sup>) ; Kiernan et al., 1993<sup>21</sup>) ; Sigafos & Pennell, 1995<sup>28</sup>) ; Schroeder et al., 1997<sup>27</sup>)、本研究でも同様の結果が得られた。

本研究の結果より、自傷行動と主となるコミュニケ

ーション手段との関係性には一定の傾向があることが明らかとなった。自傷行動の高頻度群の子どもが主となるコミュニケーション手段を持っていないのではなく、「手さし・ジェスチャー」などであった。一方で、多語文でコミュニケーションをとることができる子どもは自傷行動の高頻度群では少なく、反対になし群で多いことがわかった。このことから、他者に対してコミュニケーションをとろうとする意思がまったくないのではなく、何らかのコミュニケーションを図ろうとしているのだが、その段階で意図が明確に伝わらないために、自傷行動が高頻度で出現している可能性も示唆される。つまり自傷行動の出現には、他者に対して明確にコミュニケーション意図が伝わらない、という伝達性の問題が関係していることが推測される。

しかし、本研究においては、自傷行動がどのような原因で維持されているのかというような、自傷行動の機能については明確に分析していない。I wata, Pace, Dorsey, Zarccone, Vollmer, Smith, Rodgers, Lerman, Shore, Mazaleski, Goh, Coedery, Kalsher, McCosh, and Wills (1994<sup>20</sup>)は、自傷行動に何らかの要求意図が含まれているのは70%以上であるということを報告しているが、言い換えると、残りの30%弱は感覚性の自傷行動を示しているといえるだろう。

### 4.3 自傷行動と活動レパトリーとの関係性について

生活年齢群別に、どの活動レパトリーが多く出現しているかを分析したところ、小学部では身体を使った遊びや感覚遊びが多く、低学年では玩具の単純な操作、高学年では絵本を見るなどが多かった。中学部では対人遊び、高等部では課題や対人遊び、他の人のおしゃべりなどを主な活動レパトリーとする傾向にあった。単純な物の操作から物や人を介する活動へと、生活年齢とともに遊びの発達段階の成長が見受けられる。

本研究では「休み時間に何をしているか？」という質問に回答してもらうことで、特定の活動やスケジュールが設定されていない、自由な時間帯に、子どもたちが何を行っているか調査を行った。その結果、自傷行動の出現頻度の違いによって、自発的に行っている活動の数に差がないことがわかった。つまり、自傷行動が高頻度で出現している子どもも全く出現しない子どもも、自由な時間帯に行う活動は量的には違いがなかった。しかし、その活動の質は大きく異なっていた。自傷行動が高頻度で出現する子どもの場合、身体遊びや感覚遊びを行っていることが多く、ルールのある遊

びは少なかった。反対に、自傷行動がない子どもは対人的な遊びが最も多く、高頻度群で多かった感覚遊びは少ない結果となった。また、自傷行動高頻度群の子どもたちの約半分は、常同行動も高頻度で出現していることがわかった。感覚遊びは、一人で行えることが多く、暇なときにその行動自体が生み出す感覚を求めて、あるいは嫌な刺激から逃れるために、自分で刺激を出して刺激を享受する（井上, 1998<sup>17)</sup>）という、感覚性の自傷行動や常同行動と、共通の強化を自動的に獲得している（Iwata et al., 1994<sup>18)</sup>）といえる。自傷行動を高頻度に示す子どもたちに対しては、単純に活動レパートリーの数を増やすだけではなく、感覚遊びからさらに別の活動レパートリーへと拡大し、その質の向上を図ることで、自傷行動を“締め出す”ことができるのではないだろうか。

#### 4.4 結語

本研究の調査結果より、自傷行動が高頻度で出現するのは、自閉症であること、主となるコミュニケーション手段がないのではなく伝達性が低いものであること、常同行動が高頻度で出現すること、自由な時間において自発的に行う活動レパートリーとして感覚的な活動が多いこと、の4点との関係性が深いことが推定される。

自閉症の特徴の一つとして、常同的な行動の出現率が高いことや特定の感覚に没入しやすいといったことがあげられる。なぜ、自閉症は自閉症でない人に比べて自傷行動が高頻度で出現するのか、ということについては、さらに自閉症の原因論も含めて、今後詳細に検討することが必要である。しかし、それほど激しくなかった常同行動が激しい自傷行動に移行した事例も報告されており（Hall et al., 2001<sup>11)</sup>）、この3種類の行動形態が産出する感覚に注目した検討が重要ではないだろうか。

近年、自傷行動をはじめとする行動問題には何らかの要求を伝えるコミュニケーション意図が含まれているものも少なくないことが明らかとなってきた（Iwata et al., 1994<sup>19)</sup>）。そして、その行動の機能に着目し、行動問題と等価な機能を持ちかつ社会的により受け入れやすい代替行動に置き換えていくといった機能的コミュニケーション訓練（Functional Communication Training；Durand & Carr, 1985<sup>5)</sup>）による介入が大きな成果をあげている。一方、Horner（1980<sup>14)</sup>）は、重度知的障害で行動問題を示している学齢児を対象とし、自傷行動と相対する行動との分化強化法と平行して、玩具や子どもの関心のあるものなど豊かな環境を

提供していくことで、自己刺激行動、自傷行動、その他の反社会的な行動が有意に減少し、対象物に対する適切な行動が増加したことも報告されている。この研究からも、適切な行動を増加させるだけでなく、子どもの活動レパートリーの拡大を促すことが自傷行動の低減に有効であることが示唆される。今後、子どもの活動レパートリーの質の向上を図るための方法を検討することが必要である。

#### 文 献

- 1) Berkson, G. & Davenport, R.K. (1962) Stereotyped movements of mental defectives. Initial survey. *American Journal of Mental Deficiency*, 66, 849-852.
- 2) Berkson, G., Rafaelli-mor, N., & Tarnovsky, S. (1999) Body-rocking and other habits of college students and persons with mental retardation. *American Journal on Mental Retardation*, 104, 107-116.
- 3) Borthwick-Duffy, S.A. (1994) Prevalence of destructive behaviors. In T Thompsons, D.B Gray (eds) *Destructive Behavior in Developmental Disabilities: Diagnosis and Treatment* (pp.3-23). Thousand Oaks, CA: Sage.
- 4) Chamberlain, L., Chung, M.C., & Jenner, L. (1993) Preliminary findings on communication and challenging behavior in learning difficulty. *British Journal of Developmental Disabilities*, 39, 118-125.
- 5) Durand, V.M. & Carr, E.G. (1985) Reducing behavior problem through functional communication training. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 18, 111-126.
- 6) Durand, V.M. & Crimmins, (1987) Assessment and treatment of psychotic speech in an autistic child. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 17, 17-28.
- 7) Einfeld, S.L. (1992) Clinical assessment of psychiatric symptoms in mentally retarded individuals. *Australia and New Zealand Journal of Psychiatry* 26:48-63.
- 8) Emerson, E., Kiernan, C., & Alborz, A. (2001) The prevalence of challenging behaviors: A total population study. *Research in Developmental Disabilities*, 22, 77-93.
- 9) 藤原義博 (1999) 機能的コミュニケーション訓練の臨床的意義, 小林重雄監 発達障害の理解と援助, コレール社.
- 10) 肥後祥治・小林重雄 (1990) 知的障害児・者の自傷行動の研究 ―施設での実態および適応行動尺度による行動特性の分析―. *心身障害学研究*, 15(1), 35-45.
- 11) 肥後祥治・小林重雄 (2000) 知的障害児・者の自傷行動の生起パターンに関する研究―条件統制下における観察をとおして―, *国立特殊教育総合研究所研究紀要*, 27, 47-54.
- 12) Hall, S., Oliver, C., & Murphy, G. (2001) Early Development of self-injurious behavior : A empirical study. *American Journal on Mental Retardation*, 106, 189-199.
- 13) 平澤紀子・藤原義博 (1995) 発達遅滞児の課題場面における問題行動への機能的コミュニケーション訓練

- 置換条件の持つ伝達性の検討—, 特殊教育学研究, 33, 11-20.
- 14) 平澤紀子・藤原義博 (2002) 激しい頭打ちを示す重度知的障害児への機能的アセスメントに基づく課題指導—課題遂行手続きの形成と選択機会の設定を通じて—, 特殊教育学研究, 40, 313-322.
- 15) Horner, R.D. (1980) The effects of an environmental 'enrichment' program on the behavior of institutionalized profoundly retarded children. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 13 (3), 473-491.
- 16) 飯田順三・岩坂英巳・平尾文雄・田原宏一・橋野健一・松村一矢・木寺克樹・井川玄朗 (1993) 精神遅滞児の問題行動—養護学校におけるアンケート調査より一. 小児の精神と神経, 33 (1), 43-51.
- 17) 井上雅彦 (1998) 自閉症を持つ人への「遊び」の支援, 麻生武・綿巻徹編 遊びという謎, ミネルヴァ書房.
- 18) 伊藤良子 (2001) 自閉症児の遊びの特徴と指導方法に関する研究動向とその課題, 特殊教育学研究, 39, 43-51.
- 19) Iwata, B.A., Dorsey, M.F., Slifer, K.J., Bauman, K.E., & Richman, G.S. (1982) Toward a functional analysis of self-injury. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 27, 197-209.
- 20) Iwata, B.A., Pace, G.M., Dorsey, M.F., Zarcone, J.R., Vollmer, T.R., Smith, R.G., Rodgers, T.A., Lerman, D.C., Shore, B.A., Mazaleski, J.L., Goh, H.L., Coedery, G.F., Kalsher, M.J., McCosh, K.C., & Wills, K.D. (1994) The functions of self-injurious behavior: An experimental-epidemiological analysis. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 27, 215-240.
- 21) Kiernan, C. & Qureshi, H. (1993) Challenging behavior. In C. Kiernan (ed.), *Research to Practice? Implications of Research on Challenging Behavior of People with Learning Disability* (pp.53-65). Clevedon, Avon: British Institute on Learning Disabilities Publication.
- 22) 小笠原恵・守屋光輝 (2003) 知的障害養護学校における自動・生徒の示す問題行動の現状と課題. 第40回日本特殊教育学会発表論文集, 729.
- 23) Piaget, J. (1945) 大伴茂訳 (1960) 遊びの心理学, 黎明書房
- 24) Risley, T. (1996) Get a life? Positive behavioral intervention for challenging behavior through life arrangement and life coaching. In Kogel, L.K., Koegel, R.L., & Dunlap, G. (eds), *Positive behavioral support*. Baltimore: Paul H. Brookes Publishing Co.
- 25) Schroeder, S.R., Schroeder, C.S., Smith, B., & Dalldorf, J. (1978) Prevalence of self-injurious behaviors in a large state facility for the retarded: A three-year follow-up study. *Journal of Autism and Childhood Schizophrenia* 8 :261-269.
- 26) Schroeder, S.R., Tessel, R.E., Loupe, P.S., & Stodgell, C.J. (1997) Severe behavior problems among people with developmental disabilities. In WE MacLean Jr (ed.), *Ellis' Handbook of Mental Deficiency, Psychological Theory and Research* (3rd edn) (pp.439-464). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- 27) Sigafos, J., Arthur, M., & O' Reilly, M. (2003) 園山繁樹監訳 (2004) 挑戦的行動と発達障害, コレール社.
- 28) Sigafos, J. & Pennel, D. (1995) Parent and teacher assessment of receptive and expressive language in preschool children with developmental disabilities. *Education and Training in Mental Retardation and Developmental Disabilities*, 30, 329-335.
- 29) 篠崎麻利子・古川宇一 (1993) 発達障害児の思春期における問題行動の調査研究. 情緒障害教育研究紀要, 12, 27-34.
- 30) Sturmey, P. & Vernon, J. (2001) Administrative prevalence of autism in Texas school system. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*.
- 31) Symons, F.J., Koppekin, A., & Wehby, J.H. (1999) Treatment of self-injurious behavior and quality of life for persons with mental retardation. *Mental Retardation*, 37 (4), 297-307.
- 32) Wing, L. & Attwood, A. (1987) Syndromes of autism and atypical development. In DJ Cohen, A. Donnellan, R Paul (eds), *Handbook of Autism and Pervasive Developmental Disorders* (pp.3-19). Silver Springs, MD: Winston.